

# 中学生の「社会体験学習」の効果に関する研究

- 不登校傾向生徒の「トライやる・ウィーク」効果を中心に -

心の教育総合センター

高校教育研修課 指導主事 小林 宏

## 要旨

「中学生用社会体験学習効果測定尺度」<sup>1)</sup> を用い、平成 12 年度に実施された「トライやる・ウィーク」体験者の事前・事後得点を分析した結果、「勤労観」、「社会的協調」、「家族のきずな」において、男女ともに有意な得点増加がみられた。平成 11 年度調査に見られた特に女子の得点増加が顕著という結果は見られず、女子の得点が高いという性差（「社会的協調」「家族のきずな」）が見られた。また、「学校へ行きたくないか」「実際に休んだりしたことがあるか」等のアンケート項目を用いた群別分析の結果、不登校傾向生徒においても「トライやる・ウィーク」が中学生の社会的発達を促進することが実証された。

キーワード 中学生 社会体験学習の効果 トライやる・ウィーク 不登校傾向生徒

## はじめに

本県教育委員会は、平成 10 年度より県下の中学 2 年生を対象に、一週間の社会体験活動を実施をした。これが「地域に学ぶ『トライやる・ウィーク』(以下「トライやる・ウィーク」という。)」である。

心の教育総合センターでは、この「トライやる・ウィーク」を体験した中学 2 年生に対し、心理学的な効果を数量的に継続して測定し、同事業の在り方を検討する資料となることを目指した。

### 1 中学生の社会体験学習に関する従来の研究

文部省中央教育審議会<sup>2)</sup>は、平成 10 年 6 月に「新しい時代を拓く心を育てるために - 次世代を育てる心を失う危機 - 」と題した答申を行い、幼児期からの心の教育の重要性を指摘している。中でも、地域の教育力に依拠した体験学習の必要性は、将来の職業観や勤労観の育成をめざそうとするとともに、両親等保護者の「働く姿」に接することによって、親子関係等の在り方を考え直そうとする視点を示唆している。

平成 10 年度からの調査研究を経て、小林宏<sup>1)</sup>は「トライやる・ウィーク」に参加した中学生の感想（自由記述）をもとに、中学生の社会体験学習の効果を測定しうる「中学生用社会体験学習効果測定尺度（『勤労観』『社会的協調』『家族のきずな』の 3 因子 18 項目、

以下『本尺度』という。）」を作成し、「トライやる・ウィーク」体験者の事前・事後得点の分析を行った。

その結果、「勤労観」、「社会的協調」において、男女ともに有意な得点増加がみられたが、特に女子の得点増加が顕著であり、「家族のきずな」においては男女差はみられず、ともに有意な得点増加がみられたことを報告している。

また、体験学習中に保護者（父母など）と体験学習について、よく話し合ったと答えた群ほど、事後における得点の増加が顕著であり、地域と家庭の教育力が合わさることによって、一層中学生の社会体験を豊かにすることがわかった。

### 2 本研究の目的

(1) 研究 1：平成 12 年度「トライやる・ウィーク」の効果測定及び平成 11 年度との比較研究

先述したように、心の教育総合センターでは「トライやる・ウィーク」の継続的な効果測定を行い、同事業のあり方を検討する材料となることを目指してきた。同事業の始まった平成 10 年度から、継続して「効果測定」の指標として用いてきた尺度として「自己効力感」尺度がある。同事業の初年度以来 3 年間の「自己効力感」尺度得点の同事業事前・事後の得点増加の推移の

分析及び考察は古田猛志・住本克彦<sup>2)</sup>(本誌別掲)に詳しい。一方、「中学生用社会体験効果測定尺度」を用いた測定は、昨年始まったばかりである。今後継続した測定及びその推移をもとに、同事業の今後のあり方を検討する基礎資料を提供したい。

(2)研究2：参加生徒の意識調査・不登校傾向を有する生徒の「トライやる・ウィーク」の効果

また、本尺度及び「トライやる・ウィーク」参加生徒の意識を問うアンケート項目を用いて、特に不登校傾向を有する生徒の「トライやる・ウィーク」体験の効果を検討する。

### 3 本研究の方法

(1)時期：平成12年6月～7月

(2)調査対象：兵庫県下7地域(阪神・丹有・東播磨・西播磨・但馬・淡路・神戸)各1校計7校の「トライやる・ウィーク」に参加した中学2年生、クラス計42クラス、生徒数計1,230名(男子629名、女子601名)を調査対象者とした。

(3)調査内容及び方法：本尺度18項目及び巻末資料に掲げるアンケート調査を「トライやる・ウィーク」実施前週後半及び実施後週前半に、あらかじめ筆者によって指定した手順によって担任教師等が実施し郵送にて回収した。

4 研究1：平成12年度「トライやる・ウィーク」の効果測定及び平成11年度との比較研究

(1)方法

平成12年度に実施された「トライやる・ウィーク」の体験実施前後の変化(効果)を調べるため、平成12年6月～7月の体験の事前・事後に実施された本尺度18項目について、昨年同様に次のように分析を行った。本尺度の各中学校(7校)のクラス(42クラス)男女ごとの事前・事後の合計得点の平均値をサンプルとして、事前・事後の時期(2)×性(2)の2要因分散分析を行った。この体験による変化(効果)及びその性差を考察するためである。また、クラスの平均値をサンプルとして分析に用いたのは、分散分析という分析手法のサンプル数として適切であると思われたからである。

(2)結果と考察

結果

以下、ア「勤労観」イ「社会的協調」ウ「家族のきずな」の分析結果を、エにおいて、本尺度の「合計得点」の分析結果を記した。いずれも各質問項目は5件法(5点満点)「勤労観」は7項目35点満点、「社会的協調」は5項目25点満点、「家族のきずな」は6項目30点満点、「合計得点」は18項目90点満点である。

ア「勤労観」

表1 時期・群ごとの「勤労観」の各クラスの平均合計得点の平均値と標準偏差(S.D.)

時期	性	平均	(S.D.)
事前 実施	男子 (N=42)	27.09 (S.D.)	(1.45)
	女子 (N=42)	26.80 (S.D.)	(1.41)
事後 実施	男子 (N=42)	28.13 (S.D.)	(1.79)
	女子 (N=42)	28.32 (S.D.)	(1.28)

表2 「勤労観」合計得点の分散分析結果

	SS	df	MS	F	p
A(時期)	69.03	1	69.03	98.21	***
B(性)	.10	1	.10	.03	
A * B	2.37	1	2.37	8.32	†
Total	445.35	167			

† p<.10 \*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

† は90%の確率で変化があったといえる。

\* は95%の確率で変化があったといえる。

\*\* は99%の確率で変化があったといえる。

\*\*\* は99.9%の確率で変化があったといえる。

表1に、「地域に学ぶ『トライやる・ウィーク』」体験前における「勤労観」得点の男女別の平均値と標準偏差、さらに体験後における男女ごとの平均値と標準偏差をあらわした。表2は、これらの分散分析結果をあらわしたものである。

分散分析結果を見ると、時期×性の交互作用(時期によって男女間に変化のパターンの違いが見られること)に傾向(p<.10)がみられ、時期の主効果が有意(p<.001)であることがわかる。

このことは、男子以上に女子の体験後の得点増加が大きい傾向にあるが、男女ともに「トライやる・ウィーク」体験は、「勤労観」の発達に効果があったことを示している。

イ「社会的協調」

表3に、「地域に学ぶ『トライやる・ウィーク』」体験前における「社会的協調」得点の男女別の平均値と標準偏差、さらに体験後における男女ごとの平均値と

標準偏差をあらわした。表4は、これらの分散分析結果をあらわしたものである。

分散分析結果を見ると、時期及び性の主効果が有意であることがわかる。

このことは、男子以上に女子の「社会的協調」得点が高いが、男女ともに「トライやる・ウィーク」体験は、「社会的協調」の発達に効果があったことを示している。

表3 時期・性ごとの「社会的協調」の各クラスの平均合計得点の平均値と標準偏差(S.D.)

時期	性	平均	(S.D.)
事前 実施	男子 (N=42)	19.10 (1.02)	
	女子 (N=42)	19.90 (1.09)	
事後 実施	男子 (N=42)	19.45 (.90)	
	女子 (N=42)	20.43 (.85)	

表4 「社会的協調」合計得点の分散分析結果

	S S	d f	M S	F	p
A (時期)	33.40	1	33.40	122.55	***
B (性)	8.01	1	8.01	4.93	*
A * B	.37	1	.37	1.35	
Total	198.98	167			

† p<.10 \*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

#### ウ「家族のきずな」

表5に、「地域に学ぶ『トライやる・ウィーク』」体験前における「家族のきずな」得点の男女別の平均値と標準偏差、さらに体験後における男女ごとの平均値と標準偏差をあらわした。表6は、これらの分散分析結果をあらわしたものである。

分散分析結果を見ると、性と時期の主効果が有意であることがわかる。

このことは、男子以上に女子の「家族のきずな」得

表5 時期・性ごとの「家族のきずな」の各クラスの平均合計得点の平均値と標準偏差(S.D.)

時期	性	平均	(S.D.)
事前 実施	男子 (N=42)	23.83 (1.15)	
	女子 (N=42)	24.39 (1.09)	
事後 実施	男子 (N=42)	24.37 (1.08)	
	女子 (N=42)	24.99 (1.14)	

点が高く、男女ともに「トライやる・ウィーク」体験は、「社会的協調」の発達に効果があったことを示している。

表6 「家族のきずな」合計得点の分散分析結果

	S S	d f	M S	F	p
A (時期)	12.94	1	12.94	40.67	***
B (性)	15.27	1	15.27	6.85	*
A * B	.07	1	.07	.23	
Total	237.26	167			

† p<.10 \*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

#### エ「合計得点」

表7に、「地域に学ぶ『トライやる・ウィーク』」体験前における「合計得点」の男女別の平均値と標準偏差、さらに体験後における男女ごとの平均値と標準偏差をあらわした。表8は、これらの分散分析結果をあらわしたものである。

表7 時期・性ごとの「合計得点」の各クラスの平均合計得点の平均値と標準偏差(S.D.)

時期	性	平均	(S.D.)
事前 実施	男子 (N=42)	70.02 (3.21)	
	女子 (N=42)	70.65 (2.87)	
事後 実施	男子 (N=42)	72.38 (3.69)	
	女子 (N=42)	73.75 (2.94)	

表8 「合計得点」の分散分析結果

	S S	d f	M S	F	p
A (時期)	312.78	1	312.78	116.06	***
B (性)	41.53	1	41.53	2.28	
A * B	5.83	1	5.83	2.16	
Total	2074.11	167			

† p<.10 \*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

分散分析結果を見ると、時期の主効果が有意であることがわかる。

このことは、男女ともに「トライやる・ウィーク」体験後において、本尺度合計得点を有意に増加させていることを示している。

#### 考察

結果からも明らかなように、昨年同様、本尺度の「合計得点」及び「勤労観」「社会的協調」「家族のきずな」の三下位領域すべてにおいて、「トライやる・ウィーク」体験の事後得点が事前得点に比して有意に増加し

たことが示された。

このことは、本尺度で見ると、「トライやる・ウィーク」は、中学生の勤労観、社会的協調性、家族に関する見方を有意に変化させる体験であり、社会体験学習として効果のある内容であることが実証されたことを示している。

また、既に結果で述べたように、「社会的協調」「家族のきずな」の二つの下位領域得点の分散分析において、性差が見られた。

昨年度の分析においては、「勤労観」「社会的協調」及び「合計得点」において交互作用がみられた。「勤労観」の交互作用 ( $F=8.32, p<.01$ ) の分析結果から、体験前においても女子の方が高得点であり有意な差ではなかったが、事後においては有意な差が認められた。このことは、「トライやる・ウィーク」の体験が、勤労観の発達の観点から見れば、男子以上に女子において効果的であったことを示していた。また、「社会的協調」の交互作用 ( $F=4.79, p<.05$ ) の分析結果からは、体験前において女子が男子より有意に得点が高く、事後においてはさらにその差が広がっていることが認められた。このことは「勤労観」の分析結果同様、これらの社会体験が女子に効果的であったことを示していた。「合計得点」の交互作用は、これら二下位領域得点の交互作用を反映したものと推測された。

しかし、今年度の調査では、「勤労観」において交互作用の傾向がみられた ( $F=3.38, p<.10$ ) にすぎなかった。このことは「勤労観」における時期の主効果 ( $F=98.21, p<.001$ ) との関係から、幾分女子に効果的であったが、男女ともに事後において有意に得点を増加させている（効果があった）ことを示している。さらに「社会的協調」においても交互作用は見られず、時期の主効果 ( $F=122.55, p<.001$ ) とともに、性の主効果 ( $F=4.93, p<.05$ ) が見られた。このことは、相対的に女子は男子において高得点傾向にあるが、男女ともに事後において得点を増加させている（効果があった）ことを示している。

一方、「家族のきずな」においては、時期の主効果 ( $F=40.67, p<.001$ ) とともに、性の主効果 ( $F=6.85, p<.05$ ) が有意であった。昨年度の調査では、男子より女子が高得点である傾向 ( $F=3.14, p<.10$ ) がみられたに過ぎなかった。

以上概観したように、本尺度各下位領域及び合計得点において、男女ともに事後に有意に得点を増加した。しかし、性差（男子以上に女子が高得点）はあるが、本年度調査結果は、昨年度の調査結果のように、「トライやる・ウィーク」体験後の女子の得点増加だけが有意に大きい（交互作用：女子により効果的）ことを示していない。

このことについて、昨年度調査においては「どのような『体験内容』だったか」のアンケート項目があり、その体験内容の分類及び体験内容群ごとの平均値の変化（事後得点 - 事前得点）から、「保育」「福祉」等の女子生徒の割合の多い体験群の得点増加が大きいことから「『トライやる・ウィーク』は女子に有利な体験学習となっていないか」と指摘した。

しかし、本年度調査結果を見る限りでは、体験による男女の性差は見られない結果となっている。今年度は、具体的な体験内容を問うアンケートを実施していないので、その原因を推定できない。しかし、このような継続的な調査は始まったばかりであり、いずれにせよ「トライやる・ウィーク」をより教育的に効果あるものとするためには、このような調査を継続していく必要があると考えられる。

## 5 研究2：参加生徒の意識調査・不登校傾向を有する生徒の「トライやる・ウィーク」の効果の検討

### (1)方法

研究1の調査対象者に、体験事前・事後調査時に並行してアンケート質問（巻末資料）を行い、単純集計及びクロス集計を行った。

### (2)結果と考察

#### 単純集計

事前調査アンケート：( )内は回答者数

質問項目1：「なんとなく学校へ行くのが『いやだなあ』と思ったことがありますか」

よくある	(253人)
ときどきある	(536人)
あまりない	(342人)
まったくない	(99人)

質問項目2：「前の質問で と答えた人に質問します。『いやだなあ』と思って、学校を休んだのは何日くらいですか。4月からのおよその日数を答えてく

ださい」

1日も休んでいない (644人)

1～3日 (101人)

4日以上 (18人)

休んでいないが、遅刻や早退が3回以上あった (26人)

質問項目3：「家庭では保護者(父母等)とよく話をしますか」

よく話をする (485人)

まあまあ話をする (554人)

あまり話さない (167人)

まったく話さない (24人)

質問項目4：「将来の進路やつきたい職業等についてよく考えますか」

よく考えている (222人)

まあまあ考えている (512人)

あまり考えない (400人)

まったく考えない (96人)

質問項目5：「今回の『トライやる・ウィーク』について、あなたの取り組む体験内容はあなたの希望どおりでしたか」

希望どおりの内容だ (373人)

ほぼ希望どおりの内容だ (536人)

あまり希望の内容ではない (231人)

まったく希望の内容ではない(100人)

事後調査アンケート：( )内は回答者数

質問項目1：「『トライやる・ウィーク』を体験して『中学校生活をもっとがんばろう』と思いましたが」

そう思った (308人)

まあまあそう思った (568人)

あまり思わない (277人)

まったく思わない (77人)

質問項目2：「『トライやる・ウィーク』を体験して、大人の人や社会に対する見方は変わりましたか」

良いイメージに変わった (694人)

悪いイメージに変わった (21人)

ほとんど変わらない (469人)

まったく変わらない (46人)

質問項目3：「『トライやる・ウィーク』の期間中、家庭では保護者(父母等)とよく話をしましたか」

よく話をした (392人)

まあまあ話をした (578人)

あまり話さなかった (212人)

まったく話さなかった (48人)

質問項目4：「将来の進路やつきたい職業等についてよく考えるようになりましたか」

よく考えるようになった (267人)

まあまあ考えるようになった(567人)

あまり考えなかった (295人)

まったく考えなかった (101人)

質問項目5：「今回の『トライやる・ウィーク』について、あなたにとって有意義な体験でしたか」

本当に有意義だった (753人)

まあまあ有意義だった (410人)

あまり有意義ではなかった (51人)

まったく有意義ではなかった(16人)

以上の結果であった。単純集計結果について、若干の考察を行っておきたい。

事前質問項目1の「なんとなく学校へ行くのが『いやだなあ』と思ったことがありますか」という設問について触れておく。学校に行くのが「いやだなあ」と感じている生徒や実際に休んだ生徒の人数の多寡については、教育上さまざまな意見や見解があるうが、3年前に行った調査結果とほぼ同様の集計結果となっている。

筆者が主要に関わった兵庫県「青少年の心の問題」対策研究会の平成9年度の調査研究<sup>3)</sup>において、小学校5年生から高校2年生までの調査対象者に同様の質問を行っている。中学2年生の回答割合を比較してみる。

表9 事前質問項目1の回答割合の比較

	平成9年度(N=606)	20.1%	43.5%	25.5%	10.9%
本調査 (N=1230)	20.6%	43.6%	27.8%	8.0%	
質問項目「なんとなく学校へ行くのが『いやだなあ』と思ったことがありますか」	選択肢	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない

上記表9の回答割合を見ると、ほぼ同様の回答割合であることがわかる。また、下図1、2は、同様に事前質問項目2についての回答割合を円グラフとして表したものである。調査時期が本調査は6月、平成9年

度調査は 11~12 月のため、質問に対する回答選択肢自体が異なり、単純には比較ができないが、調査時期を考えれば、月を追うにつれ、徐々に学校を休む傾向が強まることが推測される。

本研究の目的は、このような傾向にある生徒の「トライやる・ウィーク」の効果である。この分析は、次のクロス集計で取り扱いたい。

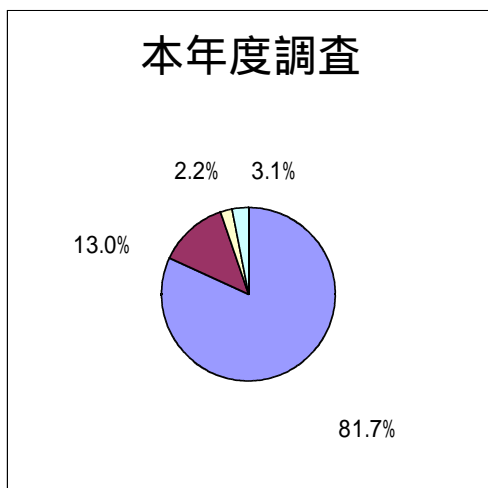


図 1 本年度調査

質問項目：「『いやだなあ』と思って学校を休んだのは何日くらいですか。4月からのおよその日数を教えてください」

一日も休んでいない

1～3日

4日以上

1日も休んでいないが遅刻や早引き（早退）が3回以上あった。

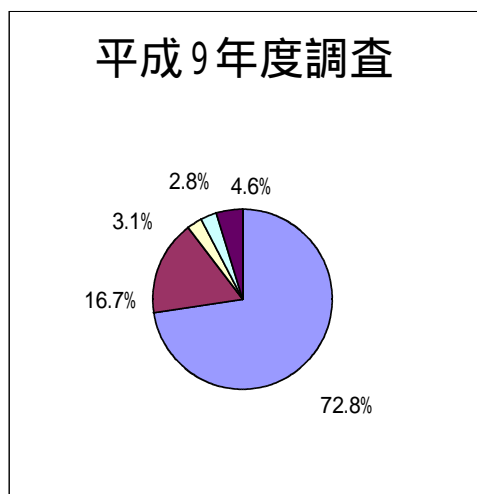


図 2 平成 9 年度調査

質問項目：「『いやだなあ』と思って学校を休んだのは何日くらいですか。4月からのおよその日数を教えてください」

休んでいない

1～3日

4日～6日

7日以上

休んでいないが遅刻や早引き（早退）が3回以上あった。

一方、事前質問項目3の「家庭では保護者（父母等）とよく話をしますか」において「よく話をすると」回答した者（485人）「まあまあ話をすると」回答した者（554人）に比して、事後質問項目3の「『トライやる・ウィーク』の期間中、家庭では保護者（父母等）とよく話をしましたか」において「よく話をした」と回答した者（392人）「まあまあ話をした」と回答した者（578人）が少なかった。

事後質問項目2「『トライやる・ウィーク』を体験して大人の人や社会に対する見方は変わりましたか」の回答結果を見ても、多くの生徒はその認識を肯定的に変化させている。また、将来の進路やつきたい職業についても関心を高めている。

事前質問項目4及び事後質問項目4は、将来の進路や職業について、よく考えているか、「トライやる・ウィーク」体験後に）よく考えるようになったかを問うている。両者の回答数を比較してみる。

表10 事前質問項目4・事後質問項目4の回答人数の比較

	222人	512人	400人	96人
事前(N=1230)				
事後(N=1230)	267人	567人	295人	101人

質問項目「将来の進路やつきたい職業等についてよく考えますか（考えるようになりましたか）」 選択肢 よく考えている（考えるようになった） まあまあ考えている（考えるようになった） あまり考えない（考えなかった） まったく考えない（考えなかった）

表10は事前・事後の進路や将来就きたい職業についての関心度を問うた結果を回答人数で比較したものである。事前・事後において、各回答人数に有意な差があるかを知るために、<sup>2</sup>検定を行ったところ、有意な差 {  $\chi^2_{(df=3)}=22.93, p<.01$  } が見られ、残差分析の結果、事前の あまり考えていない者が減り、事後において よく考えるようになった まあまあ考えるようになったと答えた者が有意に増加している（いずれも  $p<.05$ ）ことがわかった。

つまり、「トライやる・ウィーク」の期間は、多くの生徒にとって、社会や大人に対する見方や自らの進路や将来の職業について、今までの見方を改めたり、

主体的に考え始める契機であることがわかる。

昨年、「トライやる・ウィーク」の今後のあり方に触れ、「中学生の成長や発達への支援をすべて中学校が抱え込もうとするのではなく、地域の協力を委ねるべきは委ね、家庭に委ねるべきは委ねたり、啓発すべきは地道なそしてねばり強い啓発活動をおこなうべきであろう。」と述べた。

若者の「フリーター志向」が強まり職業観の希薄化が指摘されて久しい。学校においては、このような「トライやる・ウィーク」の成果を、職業的発達や進路成熟の観点からの進路指導や生徒一人一人の生き方・あり方の指導につなげていく必要もあろう。同時に、これらの課題は家庭教育の課題でもある。「トライやる・ウィーク」体験を契機に、社会や自らへと目をむけ始めた生徒とその家族が、家庭でも話し合う機会が増えれば、「トライやる・ウィーク」の効果は一層充実したものとなる。

#### クロス集計

ここでは、事前質問項目1, 2に注目し、「学校に行きたくない」と思ったり、実際にそう思って「学校を休んだり、遅刻・早退」をしたことのある生徒（この生徒達を『不登校傾向生徒』とする）の「トライやる・ウィーク」の効果について検討したい。

表11は、事前質問項目1, 2において「学校に行きたくない」と思い、実際に学校を1日以上休んだり、遅刻や早退をしたことがある群（G1と略記：153名）」と「学校へ行くのがいやだなあと思ったことはあるが、休んだりせず、遅刻早退もほとんどない群（G2と略記：684名）」、「学校へ行くのがいやだとはまったく、あるいはほとんど思ったこともない群（G3と略記：393名）」の本尺度の「トライやる・ウィーク」事前事後得点平均の変化を示したものである。

各群のサンプル数に偏りがあるが、本尺度得点について、群(3)×時期(2)の2要因分散分析を行ったところ、勤労観、社会的協調、家族のきずな及び合計得点に群及び時期の主効果が認められた。

勤労観の群の主効果が有意であった。勤労観の群の主効果は、 $F(df=2)=9.63, p<.001$ 、時期の主効果は、 $F(df=1)=120.23, p<.001$ であった。社会的協調の群の主効果は  $F(df=2)=12.22, p<.001$ 、時期の主効果は、 $F(df=1)=98.28, p<.001$ であった。

表11 各群の本尺度得点平均の変化

	事前	事後	事後 - 事前
G 1 (N=153)			
勤労観	26.01	27.73	1.72
社会的協調	18.69	19.64	.95
家族のきずな	23.21	23.82	.61
合計得点	67.90	71.18	3.28
G 2 (N=684)			
勤労観	26.70	27.94	1.24
社会的協調	19.01	19.96	.95
家族のきずな	23.99	24.50	.51
合計得点	69.71	72.40	2.69
G 3 (N=393)			
勤労観	27.71	28.97	1.26
社会的協調	19.95	20.73	.78
家族のきずな	24.63	25.26	.63
合計得点	72.29	74.96	2.67

家族のきずなの群の主効果は、 $F(df=2)=8.69, p<.001$ 、時期の主効果は、 $F(df=1)=37.84, p<.001$ であった。合計得点の群の主効果は、 $F(df=2)=12.54, p<.001$ 、時期の主効果は、 $F(df=1)=125.78, p<.001$ であった。

このことは、事前においても事後においても群間に差（多重比較の結果、本尺度3下位領域及び合計得点に  $G3 > G1$ 、 $G3 > G2$ の有意な差が見られた）はあるものの、どの群ともに事後において有意に得点を高めていることを示している。

つまり、この結果は「不登校傾向」を有する生徒にも、そうでない生徒にも「トライやる・ウィーク」は効果があることを示していると言えよう。

#### 終わりに

文末とはなりましたが、今回の調査に際し、取組の忙しい中を調査にご協力いただいた各中学校および中学生のみなさんに、心からお礼を申し上げます。

#### 引用文献

- 1) 小林宏「中学生の『社会体験学習』の効果に関する研究 - 中学生は『トライやる・ウィーク』でどう変わったか - 」(2000)兵庫県立教育研修所研究紀要第111集
- 2) 古田猛志・住本克彦(2001)「自己効力感から見た『トライやる・ウィーク』の教育的効果」(別掲)兵庫県立教育研修所研究紀要第112集
- 3) 兵庫県「青少年の心の問題」対策研究会(1998)「不登校問題の解決や予防をめざして」

「中学生用社会体験学習効果測定尺度」質問項目

	非 常 に よ く	あ て は ま る	か な り	あ て は ま る	ど ち ら と も	い え な い	ほ と ん ど あ て	は ま ら な い	ま た た く あ て い
1 親（父母など）は毎日働いて大変だ。	----								
2 世の中の人助け合って生きている。	----								
3 みんなで協力することは大切だ。	----								
4 いらぬ仕事などなく、どの仕事も社会に役立っていると思う。	----								
5 おとなは、どんなにつらい仕事でもがんばっている。	----								
6 私たちのまわりで、いろいろな人たちが一生懸命に働いている。	----								
7 親（父母など）の苦勞がわかる気がする。	----								
8 世の中は、たくさんの人の協力で成り立っている。	----								
9 家族のはげましは、ありがたいものだと思う。	----								
10 職場などでは、みんなが協力して支え合ってがんばっていると思う。	----								
11 働いている人は、それぞれに誇りをもって働いていると思う。	----								
12 親（父母など）はとても苦勞して、お金をかせいでくれている。	----								
13 働くことは気持ちがいい。	----								
14 働いている人は、難しいことでも最後まできちんとやりとおしている。	----								
15 私は、家族に支えてもらっていると思う。	--								
16 人は一人じゃない、必ずだれかが支えてくれていると思う。	--								
17 おとなは、自分の仕事に責任をもって、がんばって働いていると思う。	--								
18 私は、家族に対してやさしく接してあげたいと思う。	--								

注) 4, 5, 6, 10, 11, 14, 17の項目が「勤勞観」 2, 3, 8, 13, 16の項目が「社会的協調」 1, 7, 9, 12, 15, 18の項目が「家族のきずな」の項目である。逆転項目はない。「非常によくあてはまる」を選んだ場合に5点、以下順に「まったくあてはまらない」を選んだ場合を1点として採点する。

- 事前質問項目 1 なんとなく学校へ行くのが「いやだなあ」と思ったことがありますか。  
よくある ときどきある あまりない まったくない
- 事前質問項目 2 1で ・ と答えた人に質問します。「いやだなあ」と思って学校を休んだのは何日くらいですか。4月からのおおよその日数を教えてください。  
1日も休んでいない 1～3日 4日以上 一日も休んでいないが遅刻や早引きが3回以上あった。
- 事前質問項目 3 家庭では、保護者（父母等）とよく話をしますか。  
よく話をする まあまあ話をする あまり話さない まったく話さない
- 事前質問項目 4 将来の進路やつきたい職業等についてよく考えますか。  
よく考えている まあまあ考えている あまり考えない まったく考えない
- 事前質問項目 5 今回の「トライやる・ウィーク」について、あなたの取り組む体験内容はあなたの希望どおりでしたか。  
希望どおりの内容だ ほぼ希望どおりの内容だ あまり希望どおりの内容ではない まったく希望の内容ではない
- 事後質問項目 1 「トライやる・ウィーク」を体験して「中学生活をもっとがんばろう」と思いましたか。  
そう思った まあまあそう思った あまり思わない まったく思わない
- 事後質問項目 2 「トライやる・ウィーク」を体験して、大人の人や社会に対する見方は変わりましたか。  
良いイメージに変わった 悪いイメージに変わった ほとんど変わらない まったく変わらない
- 事後質問項目 3 「トライやる・ウィーク」の期間中、家庭では保護者（父母等）とよく話をしましたか。  
よく話をした まあまあ話をした あまり話さなかった まったく話さなかった
- 事後質問項目 4 将来の進路やつきたい職業等についてよく考えるようになりましたか。  
よく考えるようになった まあまあ考えるようになった あまり考えなかった まったく考えなかった
- 事後質問項目 5 今回の「トライやる・ウィーク」について、あなたにとって有意義な体験でしたか。  
本当に有意義だった まあまあ有意義だった あまり有意義な体験ではなかった まったく有意義な体験ではなかった